統合保育における自閉症児へのコミュニケーション支援の実態
―保育者の援助や躓きに着目して―

櫻井　貴大

Ⅰ．問題の所在と目的

近年、統合保育の必要性が叫ばれ、多くの保育所や幼稚園で統合保育が実際されている。それに伴い、保育者の質や専門性も問われるようになり、保育者に対する研修も盛んに行われるようになってきた。研修の中に自閉症児をテーマにしたものもあり、保育者も統合保育をしていく上である程度の自閉症児に対する知識や技術を持つことができるようになってきている。例えば、保育の現場で、絵カードを使いスケジュールを視覚的に見せることで見通しを持たせたり、パニックになった場合に刺激の少ない場所や個室などに行くことで落ち着くことができるようしたりするなどその有効性も認められている。これらは自閉症児にとって環境を分かりやすく設定することで、彼らが自立し安心して行動し生活できるようにするというTEACCHプログラムの考えを基にしている。つまり、自閉症児に対して環境を整えることで困難性を軽減することができるということは認知されてきていると言える。しかし､「コミュニケーションの『障害』を一方的な機能不全に解消して考えることに問題がある」と鯨岡 (1) が述べるように、コミュニケーションの問題においては自閉症児の個体機能の「障害」の問題だけではなく二者間における「関係の障害」であるため、自閉症児に対して環境を整えることだけでは解決が難しいのである。保育現場では依然としてコミュニケーションに関する問題は多く、久保山、斉藤 (2) らも保育者が気になる子どもの状況として発達上の問題に次いでコミュニケーションの問題を抱えていることを明らかにしている。したがって、本稿では保育の現場で未だに多くの問題を抱えているコミュニケーション問題に焦点を当てることにする。そして、コミュニケーション問題が典型的に現れると考えられる自閉症児を対象とし、保育者がどのような場面や状況で躓いていて、それに対してどのような援助を行っているのかという問題行動と援助方法の関係という観点から現状と課題を分析することを目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．調査時期と調査対象

調査は保育士に対する質問紙法によって実施した。2013年２月にＡ市内の270ヶ所の保育所長に対して、所属の保育士４名分の調査用紙を一括して送付した。同封された封筒にて郵送で回収した。

調査においての「自閉症児」とは①「自閉症」と診断されていること②高機能自閉症､アスペルガーは含まないものとした。また、現在、純粋に「自閉症」と診断されるケースが少ないと考えられるので、過去に受け持った自閉症児においても可能とした。

２．調査内容

(1) 保育者の属性①性別②年齢③保育歴④所属保育園（公立、私立)。保育者の属性を表１に示す。

保育士

(2) 保育の中で自閉症児とのコミュニケーション（言語コミュニケーション以外も含む）援助、指導として意識している視点について自由記述にて回答してもらった。
(3) 保育の中で自閉症児とのコミュニケーション（言語コミュニケーション以外も含む）援助、指導が難しいと感じた場面や状況を自由記述にて回答してもらった。

３．分析方法

①回収された調査用紙の全ての自由記述の内容をデータ化し、数回読み返した。②全ての記述内容を意味の単位ごとに内容を要約しコードをつけた。③コードの一覧表を作成した。④再度記述内容を読み返し、一覧表から当てはまるコードを割り当てる作業を３回行った。⑤３回ともコードが一致したもののみを小カテゴリーの記述数としてカウントした。⑥内容の関連の深い小カテゴリーを中カテゴリーとしてまとめた。⑦同様に内容の関連の深い中カテゴリーを大カテゴリーとしてまとめた。

４．倫理的配慮

文章にて個人情報の取り扱いについて説明し、回答の強制は行わず、調査票の回答をもって同意が得られたこととした。また、収集したデータについては個人を特定できない形で分析を行った。

Ⅲ．結果と考察

１．保育者の属性

調査対象の保育所270ヶ所のうち76ヶ所134人（公立46ヶ所90人、私立30ヶ所44人）の回答を得た。回収率28.1％だった。回収率が低かった理由として、現在では自閉症スペクトラムや広汎性発達障がいとして診断される子はいるが純粋に「自閉症」と診断されている子はいないという返答が見られたことから、コミュニケーションの難しさが典型的に表れていると考えられる「自閉症」と診断された子どものみを対象としたことが原因と考えられる。年齢で見ると40代が30.3％と最も多く、保育経験では10年以上20年未満が30.1％と最も多かった。

表１　保育者の属性

	項目	N	%
所属	公立保育園	82	62.1%
	私立保育園	40	30.3%
	無回答	10	7.6%
性別	女性	119	88.8%
	男性	7	5.2%
	無回答	8	6.0%
年齢	20代	16	12.1%
	30代	35	26.5%
	40代	40	30.3%
	50代	31	23.5%
	無回答	10	7.6%
保育経験	10年未満	30	22.6%
	10年以上20年未満	40	30.1%
	20年以上30年未満	35	26.3%
	30年以上	23	17.3%
	無回答	5	3.8%

２．保育の中で自閉症児に対するコミュニケーション支援・援助として意識している視点

分析の結果、大カテゴリーとして【本児に対する支援・援助】【本児以外に対する支援・援助】に分けることができた。中カテゴリーとして【本人の理解力に合わせる支援・援助】【人への意識を持たせる支援・援助】【本児の気持ちに寄り添う支援・援助】【他者との関わりを広げる支援・援助】【連携による支援・援助】【他児への支援・援助】に分けられ、保育者からみた、保育における自閉症児のコミュニケーション支援・援助における視点を構成する条件として抽出された。その結果を表２に示した。

３．保育の中で自閉症児に対するコミュニケーション支援・援助が難しいと感じた場面や状況

分析の結果、中カテゴリーとして【本人の理解力に合わせる支援・援助の困難さ】【人への意識を持たせる支援・援助の困難さ】【本児の気持ちに寄り添う支援・援助の困難さ】【他者との関わりを広

げる支援・援助の困難さ】のカテゴリーに当てはめることができた。【連携による支援・援助】【他児への支援・援助】のカテゴリーに当てはまる記述は見られなかった。保育者からみた、保育の中で自閉症児に対するコミュニケーション支援・援助が難しいと感じた場面や状況を構成する条件として抽出された。その結果を表３に示した

表２　保育の中で自閉症児に対するコミュニケーション支援・援助として意識している視点別記述数

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	記述数
本児に対する支援・援助（267）	本人の理解力に合わせる支援･援助(161)	視覚的に伝える	75
		ゆっくり、具体的に、短く伝える	44
		相手の気持ちを伝える	9
		落ち着いてから対応する	9
		一対一で対応する	9
		大人と一緒にしながら伝える	5
		繰り返し伝える	4
		パターンで覚えさせる	3
		場面に応じた関わり方や行動を教える	3
	人への意識を持たせる支援・援助（48）	視線を合わせる	34
		スキンシップをとる	8
		本児に働きかけていることを意識させる	4
		関わる回数を多くする	2
	本児の気持ちに寄り添う支援・援助（39）	気持ち、思いを汲み取る	16
		代弁、意味付けをする	11
		相手に伝える手段を教える	7
		共感する	5
	他者との関わりを広げる支援・援助（19）	本児の好きなあそびから関わりを広げる	10
		集団で関わる機会を持たせる	9
本児以外に対する支援・援助（15）	連携による支援・援助（10）	園内で連携をとる	6
		保護者と連携をとる	4
	他児への支援・援助（5）	他児に本児の理解を促す	5

表３　自閉症児に対するコミュニケーション支援・援助が難しいと感じた場面や状況の記述数

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	記述数
本児に対する支援・援助の困難さ（223）	本人の理解力に合わせる支援・援助の困難さ（87）	こだわりや興味が強く、伝えても納得しない、行動に変化がない	28
		一方的に話す、オウム返し、会話が成立しない	22
		ルールが守れない、理解できない	12
		相手の気持ちが分からない、誤解する	12
		微妙なニュアンスが分からない	4
		特殊アプローチをする	4
		パニックになって話が聞けなくなる	3
		その場に応じた対応ができない	2
	人への意識を持たせる支援・援助の困難さ（43）	視線が合わない	33
		反応がない	6
		自己刺激に没頭している	4
	本児の気持ちに寄り添う支援・援助の困難さ（58）	思いを伝える手段が少ない、伝えられない	28
		暴れたり、手が出る	18
		突然怒ったり、泣いたりする	9
		表情が乏しい	3
	他者との関わりを広げる支援・援助の困難さ（35）	友だちと関わろうとしない、嫌がる、関心がない	25
		気分や相手によって態度が違う	
		触られるのを嫌がる	6
			4

４．保育の中で自閉症児に対するコミュニケーション支援・援助を意識している視点と支援・援助が難しいと感じた場面や状況からみた保育者の躓きの要因

ここでは保育の中で自閉症児とのコミュニケーション支援・援助を意識している視点と支援・援助が難しいと感じた場面や状況の関係を見ていきたい。同一の回答者が問題として挙げたものに対して支援・援助も意識し具体策を出していて一貫して記述されているケースのみを対象とし抽出をした。その結果を表４に示す。なお、抽出方法は、例えば、保育の中で自閉症児とのコミュニケーション支援・援助が難しいと感じた場面や状況において「まだ、言語を発することはないので本児の思いを的確に汲み取ることが難しい時もあり、思いが伝わらないとかんしゃくを起こすことも多くあります。（表３のコードの『思いを伝える手段が少ない、伝えられない』）」と答えた回答者が保育の中で自閉症児とのコミュニケーション支援・援助を意識している視点として「本児からまだ言語は出ていないので､気持ちや要求など「○○なの？」「○○したかったの？」代弁するようにしています。（表２のコードの『代弁、意味付けをする』）」と記述されていた場合、支援・援助の具体策をとっていて一貫した記述と見なし、「思いを伝える手段が少ない、伝えられない」としてカウントした。件数が少ないものもあるため、研究の限界として今回は回答数の多かった上位５位までのカテゴリーに対して詳細な分析を行うこととし、それ以下のものについては後の研究として譲ることにする。

表４　同一の回答者が一貫して記述した回答数

小カテゴリー	回答数
思いを伝える手段が少ない、伝えられない	19
視線が合わない	16
こだわり、興味が強く伝えても納得しない	11
ルールが守れない、理解できない	8
友だちと関わろうとしない、嫌がる、関心がない	8
暴れたり、手が出る	7
一方的に話す、オウム返し、会話が成立しない	7
相手の気持ちが分からない、誤解する	6
反応がない	5
突然怒ったり、泣いたりする	5
表情が乏しい	3
微妙なニュアンスが分からない	1

回答数が多かった上位５位のものは【思いを伝える手段が少ない､伝えられない】【視線が合わない】【こだわり、興味が強く伝えても納得しない】【ルールが守れない、理解できない】【友だちと関わろうとしない、嫌がる、関心がない】であった。

以下にカテゴリーごとに実際の記述例から分析を行っていく。点線部分は保育者が支援・援助が難しいと感じる部分、実線は支援・援助を意識している視点を表している。

【思いを伝える手段が少ない、伝えられない】記述例

【記述例１】
問題：突然怒ったり、奇声をあげたりする。きっと本児の中では何らかの原因が必ずあるが、言葉で伝えることができず、保育者もその状況が分からず、原因が分からない時など。
援助：①言葉があまり出なかったので、表情や視線などの無言の要求（サイン）を見逃さないようにした。
②「やって」「ちょうだい」などの時には「○○と言うんだよ」と言葉だけでなく、手振りなどのボディランゲージも添えて、言葉でなく、身振り手振りでコミュニケーションをとることができるように意識した。

【記述例２】
問題：本児から意味のある言語を発することはなく、クレーン現象により自分の要求を表現することが多かったのですが、（中略）まだ、言語を発することはないので本児の思いを的確に汲み取ることが難しい時もあり、思いが伝わらないとかんしゃくを起こすことも多くあります。
援助：①本児からまだ言語は出ていないので､気持ちや要求など「○○なの？」「○○したかったの？」代弁するようにしています。
②本児がクレーン現象だけでなく指差しもするようになってきたので､ものと言語が結びつくような言葉かけも心がけています。

【思いを伝える手段が少ない、伝えられない】においては「言葉が出ない」ということにより自閉症児が何を思い、どうして欲しいのかということを読み取れないことに躓きを感じていることが明らかである。それに対して記述例１では自閉症児の「気持ち、思いを汲み取る」ことや「相手に伝える手段を教える」､言葉に頼らず身振り手振りで「視覚的に伝える」という支援･援助が意識されている。一方で、記述例２では自閉症児の思いを「代弁、意味付けをする」ことや、指差しだけでなく言葉につながるような支援・援助が意識されている。

これらの記述例から、保育者が躓きを感じる部分はほぼ同じであるが、その支援・援助は様々である。また、支援・援助の方法を見ると言葉で自分の気持ちや要求を充分に伝えることのできない乳児への関わり方と似通っている。つまり、自分の今までの経験や知識から共通する部分を見出し、一つの方法ではなく色々な方法でアプローチし試行錯誤しながら模索しているという躓きの要因が読み取れる。

【視線が合わない】記述例

【記述例１】
問題：視線を合わせようとしたが、なかなか合わなかった。
援助：視線を合わせて関わるようにしている。

【記述例２】
問題：視線を合わせて話をしようとするが、視線が合わない。視線をそらす。違う話をする。
援助：視線が合うように、また合わせられるように声をかけながらコミュニケーションをとっている。

【視線が合わない】では保育者が「視線が合わない」ということに躓きを感じている。その支援・援助としてほとんどの回答者が「視線を合わせる」と回答している。しかし、実際に記述例を見ていると視線を合わせようとしているが合わないという回答に見られるように、解決に至っていないことが分かる。自閉症児が視線を合わせて話すことができない原因は様々である。例えば、森崎 (3) は動作法を通して､「単にアイコンタクトが取れるようなったということではなく、働きかけ得る存在（対象）として他者の像がそのこの中に実感として捉えられてきたことを示すものと考えられる」と述べ、両角 (4) は「相手の目を見ること」と「相手の話を聞く」という二つのことを同時に行うことが難しいためと述べている。つまり、その根底にそれらの弱さがあり、その結果として視線が合わないという行動が表に出ているのである。そのため、視線が合わないから視線を合わせるということは一見して有効な支援・援助に見えるが、実際には問題の本質に対する支援・援助からズレてしまっていると考えられる。このように自閉症児の特徴として「視線が合わない」という知識は持ち合わせているものの、それに対する支援・援助に誤解があるという躓きの要因が読み取れる。

【こだわりが強く、伝えても納得しない】記述例

【記述例１】
問題：水がとても好きな子で、プールの時期に水をためていると中に入って泳いでしまう、という状況があり、言葉での制止は全くきかなかったので、どう伝えるか（どうすると今は入ってはいけない時と分かるか）が難しかった。
援助：・その子に分かりやすい伝え方は何かと探し、視覚で訴えるようにする。
・簡単な言葉で伝えるようにするようにしています。

【記述例 2】
問題：禁止が分からず、高い所にのぼったり、勝手に外に出て行くなど危険なことをした時、なかなかこちらの思いが伝わらない難しさを感じた。
援助：なかなか生活習慣が身に付かなかったり、危険なこともよくする子であったので、絵カードを作り、視覚に訴えるようにした。

【こだわりが強く、伝えても納得しない】では何かの行動において「制止が難しい」ということに保育者が躓きを感じていることが明らかである。それに対して、言葉では伝わりに難いので視覚的に伝えたり、簡単な言葉で伝えるようにしていることが分かる。近年、TEACCHプログラムの有効性が実証されるようになり、視覚的に伝えたり、具体的に伝えたりするということは自閉症児に対して有効であることが明らかになってきている。表 2 から「視覚的に伝える」「ゆっくり、具体的に、短く伝える」の回答数が多かったことからも、その考えが浸透していることが読み取れる。しかし、別府 (5) は「理解」していても情動調整ができない可能性を指摘している。また、平澤・藤原・山根 (6) の調査から「集団活動から逸脱する自閉症の子どもに、視覚的手がかりを活用しては、という助言を得て実行したものの、うまくいかないなどの記述もみられた」と述べられているように、有効な支援・援助ではあるもののそれだけでは解決することができないという躓きの要因が読み取れる。

【ルールが守れない、理解できない】記述例

【記述例 1】
問題：ドッヂボールやトランプゲームなどみんなと一緒にやりたい気持ちがあるが、ルールを理解することが難しく、トラブルになることも多かった。
援助：ゲームのルールを実際にやって見せたり（視覚的に伝える）して、本児ができるだけ理解しやすように心がけている。

【記述例 2】
問題：ルールのある遊びではルールを理解できずに参加することがある。鬼ごっこでタッチされても逃げ続けるなど。
援助：ルールのある遊びではルールをうまく理解できないことがあるので一緒に遊びに参加し伝えていくようにしている。

【ルールが守れない、理解できない】では自閉症児がルールを理解できないためトラブルになることや、上手く集団で遊べないことに躓きを感じている。それに対して自閉症児が理解しやすい形で視覚的に見せ、一緒に参加しながら集団遊びに参加できるように支援・援助していることが読み取れる。また、自閉症児自身が興味や意欲を持って遊びに参加し、他児との関わりを持とうとしているので、その気持ちを大切にして仲介して上手くいくようにしたいという保育者の気持ちとルールの理解が十分でないため他児とトラブルになってしまうという板挟みになるという躓きを読み取れることができた。自閉症児が理解できるルールを考えたり、他児に理解を求めたりするなどの集団における支援・援助がされておらず、個人のスキルだけを問題だと捉えていることから、集団における援助が十分にされていないという躓きの要因を読み取ることができる。

【友だちと関わろうとしない、嫌がる、関心がない】記述例

【記述例 1】
問題：一人遊びが多い。保育者が友達との間に入ってもなかなか興味を持たず、自分の遊びに夢中になったり、うれしそうな笑顔を見せながら逃げていってしまう。
援助：状況の理解や相手の気持ちを考える力が弱いので、なるべく分かりやすい形で本児に伝えたり、仲立ちして友達関係が崩れないように心がけている。

【記述例２】
問題：好きな遊びを楽しめるが、好きなあそびの中で、友だちとつながりを持たせようとしても自分の遊びを壊されたくなくて嫌がる。
援助：その子の好きな遊びの中から保育士やともだちと一緒に楽しめるものを探す。

【友だちと関わろうとしない、嫌がる、関心がない】では他児との関わりを持たせることに躊きを感じている。それに対して、自閉症児の個人的スキルだけに問題をおくのではなく保育者が仲介したり、自閉症児の好きな遊びから関係を持たせたりしている。保育者との関係を築いていき、その信頼関係と安心できる環境があって初めて、他児と遊ぶことに興味を持つことができる(7)。そして、保育者を拠り所としながら自閉症児の好きな遊びに他児を巻き込んで他児との関わりの機会を作っていく必要性が言われている(8)。ここから、支援・援助は適切だが、結果が現れるまでに時間がかかるので保育者自身が自信をもってできていないという躊きの要因を読み取ることができる。

Ⅳ.まとめ

１．保育者の躊きの要因

結果と考察から以下の保育者の躊きの要因を明らかにすることができた。

①支援・援助に誤解がある
②支援・援助を試行錯誤しながら模索している
③支援・援助の有効性は確かであるが、それだけでは解決できない
④集団における支援・援助が十分にされていない
⑤支援・援助の方法は考えられるものの、その効果が測りにくいため自信が持てない

２．保育者の躊きに対して考えられる保育者支援の方向性

①支援・援助に誤解がある

自閉症児の問題行動において理解されていないため、正しく理解し直すための保育者への研修等の支援が必要とされる。

②支援・援助を試行錯誤しながら模索している

実際に目の前の子どもの姿に合わせて、適切に評価・判断しながら効果のある具体的な支援・援助方法を探っていく必要がある

③支援・援助の有効性は確かであるが、それだけでは解決できない

支援・援助の有効性を認めながらも、多面的に捉えながら評価・判断し総合的に支援・援助していく目を養っていく具体的方法を探る必要がある。

④集団における支援・援助が十分にされていない

保育者の優れた実践から集団における具体的な支援・援助方法を探っていく必要がある。

⑤支援・援助の方法は考えられるものの、その効果が測りにくいため自信が持てない

効果が見えにくいが、支援・援助は適切であるという情緒的サポートをしていく必要がある。

引用文献

(1) 鯨岡峻『両義性の発達心理学－養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション－』（ミネルヴァ書房、p.292、1998）。
(2) 久保山茂樹・斉藤由美子・西牧謙吾「『気になる子ども』『気になる保護者』についての保育者の意識と対応に関する調査」

(『国立特別支援教育総合研究所　研究紀要』、第36巻、pp.55-76、2009年)。
(3) 森﨑博志「自閉症児におけるコミュニケーション行動の発達的変化と動作法」(リハビリテイション心理学会『リハビリティション心理学研究』、30、pp.65－74、2002年)。
(4) 両角美映『発達が気になる子どもの保育』、p.18、2008年。
(5) 別府哲「自閉症児と情動－情動調整の障害と発達」(『発達』、135、p.67、2013年)。
(6) 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子「保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究」(日本小児保健協会『小児保健研究』、66 (6)、pp.815－820、2007年)。
(7) 諏訪利明・安倍陽子編『こんなときどうする？発達障害のある子への支援［幼稚園・保育園］』p.39、2009年。
グループこんぺいと編『発達が気になる子へのかかわり方＆基礎知識』p.44、2008年。